



不毛の土地にサトウキビ畑をよみがえらせた  
森田剛さん（マニラ市郊外のポーラック）

「いっぱい食べて肥料をたくさん作ってくれよ」。太陽の光が燦々（さんざんざん）と降り注ぐ六月中旬の日曜日の朝。フィリピンのマニラから約八十里北西にあるパンパシ州のポーラックでサトウキビ農場を経営する森田剛（50）は食堂から集めた生ゴミをミミズのいる箱に丁寧に入れながらつぶやいた。

農場を始めたのは八年

## JAPASSIA アジアの中の日本

### 第3部 サムライ、異郷に ④

前。一九九一年のピナツボ火山大噴火による火山灰でこのあたりのサトウキビ畑は壊滅し雑草しか生えない土地に変わり果てていた。もう農業はできない。そう思われていた場所に生ゴミや食品工場から出る廃液などを混ぜて作った肥料を投入した。真っ白だった地面はだんだん茶色に変わり、一面にサトウキビが育つ農場ができた。

## サトウキビ畑 苦難の復活

商社マンだった九一年にマニラに赴任。砂糖買易を手掛けるうちに「安定した量の砂糖を手に入れるには農場を持つ必要がある」と実感し、会社に農業への参入を提案した。だが「リスクが大きすぎる」と却下。あきらめかけたが「やるならまめかけたが」やるならマニラにいる今だ」と奮起して独立、九九年に八十畝の農場を立ち上げた。道のりは平たんではなかった。肥料の調合から土地の改良まで試行錯誤を繰り返してサトウキビを育ててきた。だが、せっかくながら栄養のある土地に

「一歩進んで五歩下がった」と思った。砂糖買易を手掛けるうちに「安定した量の砂糖を手に入れるには農場を持つ必要がある」と実感し、会社に農業への参入を提案した。だが「リスクが大きすぎる」と却下。あきらめかけたが「やるならまめかけたが」やるならマニラにいる今だ」と奮起して独立、九九年に八十畝の農場を立ち上げた。道のりは平たんではなかった。肥料の調合から土地の改良まで試行錯誤を繰り返してサトウキビを育ててきた。だが、せっかくながら栄養のある土地に

### 火山灰10センチ積もる

1991年6月、ルソン島中部にある標高約1400mのピナツボ火山が大噴火、大量の噴煙と火山灰を噴き上げた。噴煙は同島の中部から南部を覆い尽くし、マニラとその周辺の地域は大雨の

前のような暗さに包まれた。火山灰はところによっては10センチ以上も降り積もり、農地や住居を埋め尽くした。今でも1階が火山灰に埋まり2階から上だけが地面から出ている教会が残り被害の大きさを物語る。

（敬称略）